



みどりの風

令和元年10月2日発行
校報 第567号
〔みどりの風 第110号〕
練馬区立関町北小学校

ノーサイドの精神

校長 大野 泰弘

9月20日に開幕したラグビーワールドカップ。自国開催での初戦に見事に勝利するだけでなく、第2戦には、優勝候補の一角、アイルランドにも歴史的ともいえる勝利を収めた日本代表。前回のイングランド大会における南アフリカ：スプリングボクスに勝ったときと同様に、その勝利に、日本中が大いに盛り上がっていましたが、ラグビーファンの多くはあの人にこの日本代表の勇姿を見せたい、あの人だったら、どんなメッセージを発するのだろうか、そんなことを思ったのではないのでしょうか。

その人とは…ミスターラグビーと言われ、平成28年10月、惜しまれながら53歳でこの世を去った「平尾誠二」さんです。多くの方がご存じのように、平尾さんは、伏見工業高校時代に全国高校ラグビー選手権で優勝、同志社大学では当時史上初の大学選手権3連覇に貢献し、社会人の神戸製鋼時代には日本選手権7連覇、日本代表選手としては、1987年の第1回大会から1995年の第3回大会まで出場し、特に、1991年第2回大会における日本代表のワールドカップ初勝利の立役者として大いに活躍されました。

その平尾さんと親友で、家族ぐるみのお付き合いをされていていらしゃったノーベル賞受賞者の山中伸弥先生が著された「友情 平尾誠二と山中伸弥『最後の一年』」〔講談社刊〕には、34歳という若さで代表監督に就任された平尾さんが取り組まれた数々の改革が記されていました。例えば、今日では当たり前のような海外選手の積極起用、相手チームの映像やデータの分析、他競技からの人材発掘、代表選手の待遇改善などです。これらの平尾さんの方針は、その後も継承され、今回のワールドカップにも反映されているのでしょう。ですから、山中先生が語っておられるように「平尾誠二とワールドカップを見たかった」というラグーマンが大勢いらしゃるのではないかと思います。

そのラグビーフットボールの基本的な精神の一つに「ノーサイド」というものがあります。我が国では、試合終了の時に実況アナウンサーがよく「ノーサイド」という言葉を使いますが、海外では、殆ど使われていないのだそうです。このノーサイド〔NO SIDE〕という言葉は、「試合が終了すれば、自陣と敵陣のサイドはなくなり、勝った側も負けた側もない」という意味ですが、実は、試合中だけでなく、試合の前も試合の後にもつながっている考え方なのだそうです。

昨年、5年生にラグビー教室をしてくださった元日本代表の松尾勝博さん〔現 駿河台大学ラグビー部監督 第1回から第3回のワールドカップまで平尾選手と共に日本代表として戦う〕もおっしゃっていましたが、スタンドでは試合の前から互いの代表チームのファンが隣同士に座って、応援したり試合を見たりするのだそうですし、国際試合の後には、あれほどの激しい体のぶつかり合いをした相手でも、「アフターマッチファンクション〔after-match-function〕」という交歓会では、両チームの選手、スタッフだけでなく、審判や協会関係者なども一緒になって、飲食を共にしながらその労をねぎらうのだそうです。そこには、どんなに試合で熱くなくても、ノーサイドの後は、敵も味方もなく、互いを尊重し、そのプレーを称え合う精神が脈々と受け継がれており、それが「紳士のスポーツ」と呼ばれるラグビーの伝統であって、ノーサイドの精神なのです。

本校では、今月の13日〔日〕に関中学校をお借りして、仮設校舎に移って初めての運動会が行われます。中学生の部活動に迷惑をかけないように、種目の数は少なくなりましたが、赤白に分かれて競い合う中で、勝敗だけでなく、互いの努力やがんばりを尊重し、認め合い、健闘を称え合う、そのような「ノーサイドの精神」につながる光景がたくさん見られることを期待したいと思います。

山中先生は、「平尾さんは、あの鋭くも温かい眼差しで、今回の日本代表チームのプレーを見守っているに違いありません。」と述べられていましたが、保護者、地域の皆様も、子どもたちが一所懸命に取り組む姿に温かい眼差しを注いでいただき、大きな声援を送ってくださいますよう、お願い申し上げます。